荒木貞夫[1]の口述記録

――満洲事変について――

矢　野　真太郎

東洋文庫近代中国研究班には，「荒木貞夫の口述記録」が2件保存されている。一つは，シベリア出兵に関する記録であり[2]，今一つがこの満洲事変に関する記録である。本記録は，荒木貞夫とインタビュアーの対談の生音声をオープンリール4本に録音したものであり，合計133分におよぶ。インタビュアーは，当時，東洋文庫近代中国研究委員会の研究員であった故衞藤瀋吉（1923–2007）氏であって，「シベリア出兵」と同様に，1958年3月12日に当時東京都狛江市にあった荒木貞夫の自宅で聞き取り調査を行った際の録音であろうと推定される。

満洲事変についてのインタビューが収録されたオープンリール

これらの記録には，調査の概要等を記した資料が付随しないため，その目的や経緯について知ることは，現在では困難である。しかし，本庄比佐子をはじめとする近代中国研究班のメンバー，並びに平野健一郎をはじめとする現代中国研究班のメンバーで話し合いを重ねた結果，戦後の 1958 年当時における荒木貞夫の認識や思想，社会への向き合い方を現す一次史料として，公開の価値はあると考え，テキスト化を行った。作業は，まず矢野真太郎が文字起こしを行い，久保亨，松重充浩，瀧下彩子，相原佳之，関智英，矢野真太郎の 6 名で音声を確認しつつ，テキストを校訂した。本稿では，前半 74 分を公開する。

凡例：・「araki …」はリール番号を示す。
・（　）は補足説明，［　］は文意が通るように語句を補ったことを示す。

本　文

araki 58 0312 J_A
衛藤：満洲事変のときには，あれでございますね，まだ陸大校長でいらっしゃいまして。
荒木：いやいや，満洲事変の時は。
衛藤：教育総監。
荒木：教育総監の本部長。師団長から帰ってきて。
衛藤：それで犬養［毅］内閣ができて，
（無音）
衛藤：……10，11。3 ヶ月ですか。
荒木：火の手を上げて，軍需問題というのはほぼ片付いて，それで満洲建国の問題と。そのことと熱河のこと。
衛藤：そうでございますね。錦州のところ，まだ。
荒木：錦州も。錦州問題がガサガサしておったんですが，これはまあ私は大臣になって，錦州問題は早く片付けなきゃ奉天が危ないんですよ。彼は勝った勝ったときて，どんどんどんどんあそこに，またそのいろんな小事件が起こりかけてきているんです。どうしても錦州問題は片付けなきゃいかんと。それから錦州とひとたび言えばですね，

（無音）
荒木：……てくるんです。
衛藤：ああ、そうですね。国際連盟が。
荒木：もうすぐ。で，錦州爆撃[3] したでしょ。ちょうど我々行く前ですがね。
衛藤：10 月 9 日じゃないですかね（実際には 1932 年 10 月 8 日）。
荒木：10 月 9 日ね。そこでいよいよ真剣になった。ここから先は一つのずるい手かもしれんけれども，相手方が錦州知ってる国なんてどこにもありゃせんですよ。
衛藤：外国では。
荒木：ええ。ただ錦州錦州というから，錦州問題として，これに日本が手を付けたら，けしからんと，こういう，拡大しないということから来ておるんです。我々の……
（無音及び無関係の音声がテープに収録）
荒木：……して，非常に残念だと思いますがね。それをやろうとしたの，最後の 6 ヶ月だけなんです。でもすぐ病気
（無音）
衛藤：［南次郎[4]］陸相からは引き継ぎはなかったわけでございますね。あれは関東軍がやったんだと。
荒木：それは，そのときは，それはそれほどはっきりしてないですからね。
衛藤：ああ，そうなんですか。
荒木：報告のとおり，
（無音）
荒木：後になって，やった若いやつがなんとかかんとか言い出したんで，ああそうだろう，おかしいなということなんですよ。それはいまだに確定してないですよ。東京裁判もとうとうこの問題［を］確定せずに，東京裁判終わっちゃった。認定で。
衛藤：石原［莞爾］が突っ走ったんですね。
荒木：大山［文雄］[5] がです。
衛藤：そうなんですか[6]。
荒木：石原はもうほとんどあれは動けない。あっちにおったですかね。

衛藤：［山形県］鶴岡に。
荒木：行ったときにいろんな［ことが］ありました。大山は法務局長をやった，あそこ（関東軍）の法務部長です。それが来て，事細かにいろんな検事の方面からの，反対尋問では説明をして，それを聞いておれば，どうしても北大営（東北辺防軍の兵営）でやったとしか見えないんです[7]。けれども我々の肚には，そこまで割り切ってないですからね。［日本側が］怪しいと。認定されてもそれは仕方ないと思うくらいですよ。ですんで，とうとう弁駁できなかったですよ。だから結局は裁判官がそれを突っぱねた後では，支那側が日本側がやったと認定するということで，法的には何らその，それ（日本側の犯行という認定）を覆すことはできなかった。
衛藤：ああ，そうでございますか。
荒木：それから，まだあれですね，リットン報告のとき。
衛藤：ええ，そうですそうです。あのときも。
荒木：あれは，支那はこう主張すると，日本はこう主張するというだけで，断定下さずに。
衛藤：下しておりません。
荒木：過ぎてしまった。そんなことで済んでいるんですけどね。何もあれと言う必要ないと。まあ自分の肚としては，「ははあ」と思うこともありますけど，それは言うべき問題じゃないと。それから最近に東大のあれをやっとった，歴史研究をやっとって，今どこに行ってますかね，秦という人，秦郁彦[8]という人。あれが方々全部丹念に誰でも聞きまして。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：全部生きている者。彼等はあれ（戦争裁判）がないですからね，今だと思って勝手なことを言っておるし，それで日本がやった俺がやった俺がやった［と］あるんです。言った話のなかにね，生きておるのは，あのときの聯隊長をやっとった，島……。
衛藤：平田［幸弘］[9]聯隊長。島本［正一］[10]隊長。
荒木：島本。島本ね。それから花谷［正］[11]ね。それからもう一人，あの。
衛藤：片倉［衷］[12]。
荒木：片倉ね。あれらがしゃべってる。
衛藤：そこにございます，その『秘められた昭和史』に，花谷正の名前

で出ているのは，実は秦君が書いたものでございます[13]。
荒木：ああ，そうですか。あれ何書いているの。読んでみてませんけどね。
衛藤：ああ，そうでございますか。
荒木：それを言ってね，ところがみんな違っている。その場面によっては全部みんな違ってる。誰かは，今田信太郎[14]がやったと言ってますよ[15]。今田，死んでいるんです。それは，私がよく知ってる男です。それから島本君は，何か別のことを言ってます。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：三人ともこうやって，［特務］局におる者はこうやって違ってるんだと。したがって，いずれも信用するに足らずと。だから我々としては，歴史を一つの大きな国際間の日本の位置というものを考えて，私も論じたいから，それでしたがって，くだらない問題を私はほじくって聞いて，その真相をこうだということは断定してないんです。それが来りゃですね，嘘はつけないから，どうしたってそこに。知らなきゃあ，知らないんですから。で，ほじくらんということもあるから。昔から人の非行でもそうです。それを非行を知って何になるかと。知って何にもならないで，害があるならば，その人の非行は知る必要ないじゃないかと。世間でどうだって言えば，女のためだって［言えば，世間は］女のためだって思ってるし，金のためだ［と言えば，世間は］金のためだと［思う］。そうじゃない。こういうような義理合いからいったというなら，どれでも良いと。それは私の新聞記者のニュース取材，取材するんじゃないと。こういうことが私の考えであった。実はその点についてははっきりしてた。

張作霖爆死事件のときもそうです。これはもう実に見事に証明してあったですけどね。何人も，あれ技術官まで入ってるんですからね。どうも。しかしあれだけのことをなん……
（無音）
荒木：……たくんであっても，一部はそういうことをやりますけどね。軍の方針じゃなく，また若干責任のある者の方針だけして，責任ないものでやったんだろうと。かもしれないと。けれども，こういう証明が，これを否定することはできないんですよ。だから聞いてないんです[16]。

衛藤：はあはあ，そうですか，なるほど。
荒木：ええ。当時は。後に分かったのはですね，田中義一さんならば，大黒星（だいくろぼし）ですね。そういう判断をすれば，そこでもって主宰ができます。こうすると，方針を。田中さんはああいうような人の良いところもありますから。それと深刻に考えることはあんまりしない人ですから。そこでこれは，大政党なんてもうしきりと，当時の憲政会ですか，民政党ですか，そのときはどっちだったですかね，名前は，民政党か。
衛藤：いや。まだ憲政会（実際には立憲民政党[17]）。
荒木：憲政会。それからぎゃんぎゃんぎゃんぎゃん突かれて，それで調べてみろ，調べてみることになったんです。今のようなのは，ちゃんと立派なんですよ。そこで憲兵出してますよ。最初，陸軍省におる，誰でしたかな，少佐です[18]。それが行って，報告の通りと答えて，それで（数語不明）間違いないんだと。それでも議会に向かっちゃ，軍部じゃないと。日本人がやってるなら，我関せず。そこに弱点を抱えます。少なくとも，もし声を大にして呼ぶなら，隣邦の元首ですよ，あのときは。彼（張作霖），大元帥ですからね。もうとにかくずっと出て行って，まあだんだんだんだん引いて，あそこに来るんです。それを殺したということになって，意地悪く言えば，支那人がもし意地悪く，これに対する非常な国際問題として，賠償も生じ，不届き千万ということになりますわね。
衛藤：そうですよ。
荒木：だから日本人が一人でも加わっておったらいかんと。だから報告はもうちゃんと支那の，南支那の（無音，「［南方］便衣隊の所業」〈『東京朝日新聞』1928年6月5日朝刊〉，のような文言か）あったとして，しかも新聞の，あるそれがしの名前が出ています，『朝日新聞』に。それはスパイとして，そういうようなことの計画が行き通ってるんです。それが，俺がやったと南の新聞に出してます。だからもうちょっと言っちゃったら良いじゃないかと。けれどもやり方はいかにもその，日本くさいとこがあるし，と思うけど，黙っておったです。で最初，そういう私は肚でおったから，一向に気にもせず。

それから満洲を私，昭和4年に行ったんです。陸大の校長のとき[19]。そのときの満洲の情勢は，それこそ一触即発です。マッチで擦って火を付ければ，発火点に到達してるんです。ばあっと燃え上がると。誰が先

にたばこを吸ったか，誰が先にマッチを擦ったかというのは，もう問うところではないと。
衛藤：なるほど。
荒木：形勢こうなってるんだと。それで自分で判断して，危ないって見たやつが先に火つけるかもしれないんだと。こういう頭を持っとったから，[張作霖爆殺事件が]起こったなと。どっちがどうということはもう，こう来とるんだから，それで良いじゃないかと。いまさら詮索してみたところで，何のプラスになるんだと。
衛藤：なるほど。
荒木：こういうことで黙っておったんです。
衛藤：そしてもう大臣に就任なさるときにはもう，満洲国を独立させるんだということは，軍を粛清なさるという片一方の理想案と，同時に考えてらした。
荒木：そこでね，ここでは，まあ今の話は，張作霖爆死事件ですけどね，でもこれは打ち切って，このときの話はまた別になりますからね，当時と。それから田中［義一］さんが非常にやったのと，まあ田中さんのずれでもって間違ったんですね。圧迫しちゃったんですが。
　で，今度のやつ（柳条湖事件）は，私が行ったときにはもう満洲，弾を撃つことはほぼ，錦州を残して，ほぼ済んじまった。で，錦州は今のひ（「引いた」の言いかけか），先に出ていて，国際関係でギャーギャー言われたんで，兵を引いたです[20]。［日本側が］引いたところは，［中国が］勝ったときたです。それでぐんぐん出てきたと。それで奉天の近くはなんと言いますか。
衛藤：新民屯。
荒木：新民屯のもう少し南。なにこうし。
衛藤：湯崗子。
荒木：いや，湯崗子じゃないです。もっと小さなとこです。
衛藤：大凌河でしょうか。
荒木：そうこうし[21]でしたかな。何か。地図見ればすぐに分かります。そこでは［日本側は］もう危ない。新民屯方面もそうです。朝鮮の近くにぐんぐんぐんぐん進出してきたんです。それでいつどうなるか分からないという。こちらで考えたんですよ。つまり情報が分からないと。撃

ち合ったときは今度また奉天に避難すると。またそこで始まると。だから錦州だけはもう早く。そしてあれは満洲も，奉天省のなかですからね。あの癌を抑えなければ，あそこから始終いろんな攪乱運動が出てくると。そこで錦州は［占領］しないと，このまま転移すると。遼西地区粛清[22]とやったんです。世界のやつは知らないですよ。

衛藤：なるほど。

荒木：何を言ってるんだと。どこだろうなんて考えている間に，早くやらないかんです。兵は迅速を尊びますからね。そこで朝鮮の一旅団が出てきとったのは，さらに室［兼次］[23]の師団（第20師団）でしたか。全完全師団にして，そして遼西粛清という名の下に，無血，錦州に飛び込んでいかないといけない。それでざあーっときて，なんともない。ギャーギャーしてる間に錦州に入っちゃったです。

衛藤：1月の3日でございますか。

荒木：1月ですかね。入って。入ってしまうと，何の戦［も］してないでしょ。で，待ってて平和裏に終わったから，国際関係の方面でも，くちばしを入れる余地がなくなってるんですね。

衛藤：なるほど。

荒木：そのままで。小さいのがしれないですから。それで錦州が終わったんです。これが，私が着任する，どうしてもこれを阻止せなならんと。というので錦州問題，肚決めて。で，錦州問題に，いわゆる遼西粛清のための，臨時支出もないな。議会解散しておりました。解散しとったんです。そこで枢密院，あるいは議会，まあ停会。

衛藤：停会中ですね。

荒木：そこで枢密院によってとらにゃならん。それを支出して，枢密院にかける。1月の31［日］です（実際には1932年1月30日）。はじめ枢密院会議を開いて。

衛藤：それじゃあ，それまでは陸軍省としては特別な費用は支出なさらなかったわけですか。

荒木：まあ，融通はしたでしょうな。公認されて，その予算をとってからやったんじゃなくして。

衛藤：ああ，そうでございますか。

荒木：大蔵省は出したんですよ。それを承認させなかった。議会の承認

でなしに，事後承認になりますがね。緊急支出です。
衛藤：そうでございます。
荒木：で，緊急支出であるんで，議会がもうない，当時。停会でしたかね。その後に解散でしたかね，確か。1月の31日だから，いやあの停会中です。
衛藤：停会中でございますね。その後に解散した。
荒木：そうです。そこで，あれは粛清がほとんど終わってですね，入ったのは1月でしょう。
衛藤：はい。1月の3日に錦州占領いたしました。
荒木：それで会議は1月31日。で，枢密院で。そのときに，これは偶然に，私が，これぞ天佑だったですよ。枢密院会議がその問題を，まあ通過して，御前会議ですけどね。ちょうどその頃には，その頃から軍というものは嫌われておったかなんや知らんが，石井菊次郎[24]。
衛藤：石井菊次郎子爵ですね。
荒木：あれが枢密院の外交関係の顧問官です。陸軍大臣にお尋ねしたいときたです。不意打ちにね。お伺い。いろんな前の国際関係の，自分（石井）の過去のことを。いろいろ例がありますがね。長くなりますがね。満洲なんだ助けたって，今日の味方は明日は敵になるんだと。ブルガリアの例を引いてね。ロシアが独立させてやったのに，後にああやって背いてるだと。そんなことはだめだということが，のような例をやって，満洲に力こぶ入れたって，そんなん味方になりゃしませんということです。そういうことの後に，お伺いすると。満洲事件の目的ですね，満洲処理の目的。それから満洲処理の目標，目標という字（ことばの意味）を使ったんですが，目標というのは，相手方はという意味ですね，目標。それから満洲事件の範囲，どういう風にお考えになるかと。要約すればそれまで。若干長く延びるですけど，点はその三つなんです。ちょっと不意打ち食ったんですよ。別に考えておらず。内閣の方針も何も決まってるわけではありませんからね。1月31日ですよ。ちょうど1月31日はね，第一次上海事変（1932年1月28日に交戦開始）がガタガタやってるときです。
衛藤：そうでございますね。始まって2，3日経った。はあはあ。
荒木：片っぽは満洲国建設でもって，盛んになんとか院，かんとか院が

できてますよね[25]，あのときは。それで于冲漢[26]が出てきたり。それから熙洽[27]が。
衛藤：きたり。
荒木：したり。下が，内田［康哉］[28]もそうだ。それがちょうど。［陸相に］着任してから，なんということないですよ，［陸相就任は］12月の13日ですからね，それで内部の人事を早く決めなならん。人事をやったら，閑院宮［載仁親王］[29]さんを置かなならん。参謀総長が責任をとってやめなならんと。参謀次長もやめなならんと。十月事件[30]です。そういうことでガタガタして終わって，1月。その頃には満洲はそういう風に思われてしまっています。錦州問題とかそういうのもやったんですが。1月の最初ですね。そしてああいう事件がありますよ，それで。虎ノ門じゃない，あれ（桜田門事件[31]）。
（中略）[32]
荒木：そういうなかに空白が。それは翌日ですか，即日か，その議に及ばずと。国情はこういう情勢だから，さらに政務を励めということで留任。まあいろんなとこで，ギャーギャー言っとったですよ。まあね，うるさい人はいますからね。荒木は自殺したらなんて，私はそんなことでもって，自殺しようとは思わないですけどもね。なんとかしないかとか，けしからんとかなにかということでも，さすがにちょっとふがいがなかったです。

それから参謀次長が代わってですね，これも一問題があるんですよ，ゴタゴタした嫌な問題が。それで真崎［甚三郎］[33]がなって，ようやく着任したのがその頃です。それから参謀本部はそれでもって，参謀総長も，参謀次長が空白でも，参謀総長が代わったんですね。宮さんでしょ。その間片っぽガタガタして。

それでこう，板垣［征四郎］が上京してきて，初めて満洲の情勢を話をしたのが，1月の3日だったんです。それで初めて満洲の情勢を私たちはつかむ。それまでは教育総監ですからね。毎日電報はそんなものは我々の手には来ないですよ。逆に言うと，［電報が来るのは］参謀本部ですけれども。強いて尋ねれば分かりましょうけども。どっちにしたって決まった問題なんで，そんなことちょっかいしてもしょうがないと思っておったですけどね。そういうことで，初めて分かって，その頃に

河本［大作］も確かその前後に来たと思う。
衛藤：東京に来て，いろいろ暗躍したという噂でございます。
荒木：ええ。それで満洲独立したときにどうするかと。独立機運だと。それが他に道がないようだと。板垣［征四郎］もほぼ同一の意見であった。それで満洲の性格をどうするかと。そのときにはもう溥儀皇帝は関東州に来てますからね。
衛藤：ええ。旅順に来てました。
荒木：湯崗子ですか。
衛藤：湯崗子から後に旅順に移りました[34]。
荒木：旅順にね。で，おる頃で。どういう性格にすると。やっぱり進歩的ですからね。皇帝じゃだめだと。で，大統領なんて決めても，これもつまり，清朝の皇室が主権者になったということをなしにしたいと。いわゆる民衆の新しい性格を考えてますから。そこで皇帝にもせず，大統領にもせず，それはいずれ民意によって決めようじゃないかというので，これは河本が来たときでしたよ。河本が非常に悩んで，私に話してますからね。とうとうその間に出た案が執政なんです，臨時。
衛藤：なるほど。
荒木：それで皇帝は1年。まあ進まないと。責任が怖いと。じゃ，仮にですね，1年ということで，約束をしたわけで，執政溥儀皇帝として出発したのが，1月のそのゴタゴタの頃です。

それでまもなく1月の半ばに，17日ですか（実際には1932年1月18日），日蓮宗の坊主が殺されたと。上海。それでゴタゴタゴタゴタ，上海事変。こういうことでガタガタしてるときに，まだこちらの方針も閣議もやってる暇も何もないんですよ，今のことで。大方針どころじゃないですよ。みんなどうしていいか，手をついて分からない。前のやついきなり放題で，つまり満洲における出先のゴタゴタとしか受け取ってないですからな。で，拡大しないようにして。最後落ち着いたらば，元の原位置に復そうということが，前の内閣のこの方針でした。

そんなこと収まるものなら，何も。それは事情を知らない手合いなんです。日本の国内情勢と，我々の前にお話したようにですね，大正の第一次世界大戦に帰ってきてから，支那工潮（労働争議）というのも荒れに荒れているんですよ。そんなことじゃないんだと。軍部じゃないです

からね。青年層はみんな浮き上がってますから。それで今，東大の四元［義隆］[35] 君何かの一味が6人血盟団[36] に加わってますしね。それが京大の方は誰ですかね，言ったような今の名前が出て，血盟団の反撃のときに，ずっと名前が出るの分かってます。それから小学校の先生，農村青年というようなものがみんな加わって。血盟団一つ見たって，事情は分かりますわな。血盟団に軍部はおりません。軍部はだめだから，俺らでやるというので，あれ血盟団に行ったんですから，井上日召が。これでもって青年層がどうだっていうことが分かると。こういう情勢で，昭和の，今の満洲事件が起こる前の状態がそうですからね。

そこでゴタゴタして，今のようなことが起こったとこで，方針は決定してないが，私の頭にはですね，もう大勢というものは，小さな尽力では挽回できません。いきおい夏になったら，仕方がない，帷子着るんだという，如何にいい立派な毛皮を持っておっても，帷子着るんだという，そこが現実の問題と理想の問題とを組み合わしていかにゃならんですね。理想家の方は，どこかの毛皮の方が高価なもんだ，毛皮着ようと，こう主張するし，現実派の方はそれどころじゃないです。そんなことは理想なんだ，放りっぱなしで，帷子通せ通せで来るですから。しかしやがて冬は来るんだから，毛皮もあったんなら，それにちゃんと用意して，着たることにやらんと。これは現実派足りないですよ。だから理想と現実のかみ合わせなんじゃないかと。我々はまだその晩地方におりましたからね[37]。帰ってきたのは8月の15日ですから。帰ってきて1ヶ月経って。

衛藤：満洲。

荒木：満洲事変でしょ。その間教育総監部でしょ。だからもう帰ってきて，方々に挨拶する暇もないときに，満洲事変が起こってる。起こったときは，電報は見ませんし，内容のことはなんとか細密は知りませんからね。それでだから三月事件[38] すら知らなかったですからね。

衛藤：ああ，そうでございますか。

荒木:三月事件はその前に大川［周明］から聞いて，大体筋は分かっとったです。これが政治問題になってくるとは考えられない。そのちょうど私が教育総監［として］戻ってきた，満洲事件が起こった前後でしょ。若槻［礼次郎］総理が南［次郎］さんに，三月事件というものがあった

そうだと。これには陸軍大将が参加しておると。いずれもう議会が近くなってくると。それまでにしっかりした答弁をしなならんから，それの調査，処置，いわば処分ですな，はっきりしてくれと言われたんですよ。

そういう大きな問題があったもんだから，杉山［元］[39] は次官ですから，私も次長ですからね，次官クラスで集まってくれと，行ったところがこういう問題が出てきたと。どうしたもんかと。総理が南さんに話したと。私どもは責任も多少軽いせいか知らんが，私としては，もう事ここに至っては，天下の大勢は，大正年間から全部荒れているんだと。一大波乱がなきゃ進まない情勢だと。ちょうど良いじゃないかと。そんなこと言ってお辞儀をしてね，陸軍悪うございますというのは，陸軍のなかがゴタゴタになると。国際問題がなければ，私は言わんと。満洲問題が起こっとって，国際機関がもう目光らせてるときに，陸軍がガタガタしたら，それこそ馬鹿にされちまうんだと。ちょうど良いじゃないかと。どうせ拡声器だと。日本の力はそこまで来てるんだから。調べましょうと。しっかり調べて，きれいにこれに対する処分しましょうと。同時に，どうぞ政界の方も，聞くところによれば，買収買収買収でもって，選挙なんてものは非常な買収だらけだと。今の閣僚，その他，ちゃんとした，どれだけきれいにやってるか，それは我々知らんと。それも一つ調べてくださいと。そんなことなしの立派な政治，どうしたら良いということをやってく他に道はないじゃないかと。こう，どういう風に言いなさいと。明日辞めても良いじゃないかと。刺し違えて，政界でこう来るなら，こちらでも政界の方を一つ，一番痛いところで。もうほとんど買収しとらん者ないんじゃないかと思うと。まあ，いうようなことを言ったことがある。

それでグズグズしてる間にもう，内閣の後続の方に，私やなんやがそういう空気を見て，久原［房之助］[40]・安達［謙藏］[41] なんていうとこの，いやこれはいかんと。なんとかして政党を超越していこうじゃないかということで，内閣が倒れたんです。そんなことが当時の空気をうかがえるんですね。

衛藤：なるほど。

荒木：そこで，枢密院はですね，そういう様態で来たからか，どうしてもあれにしちゃいけないと。立派な国策として持って行くほか道はない

んじゃないかと。悪い悪いと，お辞儀ばかりしとったんじゃ，ひけをとってはいかんという考えを持っておったんです。

そこで今の質問に対してね，目的，これはもう十分に軍が主張する次元ですから。満洲の治安が一。満洲が乱れとっては国防が立たないんです。国防の基礎は，満洲が平穏であって，その基礎のもとに，国防の大計画を立てたんだと。まずソ連が出てくるならば，満洲の平野において，これこれこれこれでもって，彼を抑え討つと。だから治安問題が問題です。ですから，それはもう，いくら切り込んできたって，私作戦部におりましたから，なんとかお答えができた。満洲の治安維持。これが目的。

したがって目標。この治安維持を乱した者，即満洲の主権者で当時あった張学良。範囲，きわめて簡で張学良が乱した彼の権力下一切が，その範囲になると，治安を維持する。すなわち東四省[42]と。こういったところ。当時，東四省知らないです。東四省まだできてから，あんまり経っておらんのですから。今までいろんな質問があったですがね，簡単に言うと，今まで不拡大不拡大と，それじゃあ拡大になるじゃないかと。熱河まで出て行くんじゃないかと。東四省というと，熱河まで入るんじゃないでしょうかと。当然，熱河は当時張学良の隷下だから，張学良の隷下の熱河も入る。はあ，熱河まで拡大するんですか，という話ですね。

それから不拡大不拡大と言っとったじゃないですかと。前任者のことを悪くは言いません。継続ですからね。不拡大と言っとったです。しかし不拡大ということの一つ解釈をしてもらいたいと。この頃の言葉の魔術とおんなじですよ。右翼とか左翼とか言ったって，解釈で。自由主義だって民主主義だって解釈。勝手に都合の良いようにやってますよ。

衛藤：ちょっと失礼します。

（テープ交換）

araki 58 0312 J_B

衛藤：どうも失礼しました。

荒木：そこで拡大ということには，時を考えていました。地域，空間と両方あわせなきゃいかんと。一言にして言えば，饅頭[43]を一つの塊で，委細はあるけど，押しつぶせば，こーっと広がると。固めれば高くなると。だから範囲と言っても，空間を考えていかないと。それで時間をな

るべく減少して，地域をなるべく減少と。それで地域が広がるが，時間を縮まる(ママ)と。地域は縮小するが，時間は延びると。それが情勢においてよく考えて，いずれかをとるんだと。したがって時を考えてもらいたいと。

私としては，もう戦のことはなるべく短時間。地域の拡大への短時間が必要だと。例えば，世界の25億が戦を始めて，鉄砲を撃ったと。1分間で済んだら，わずかの1国が10年戦されるよりも良いじゃないかと。その相乗を考えていくとすれば，我々としては，できるだけ時間の少なくで収まるように，ということを考えるんですと，私はと。それに対して，あとは地域が若干広がったって，時間が狭くなるならそれが良いじゃないでしょうかと。

まあ，自分はそう考えてまして。だから前のご意見の拡大しないということには，そういう意味もあったかもしれんけども，当時は地域の拡大ということをしないという。私は時間の拡大をしないということを第一に置いて，地域は多少広がっても，時間の縮小の方が良いと思うという風に私は考えています。だから前と少しも意見が違わないです。時を経れば，前の内閣もそうやったろうと。

これはまあ，若干ごまかしにもなるかもしれませんけども，私はそれを答えたんですね。これが饅頭論で，当時非常に笑われたもんですよ。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：饅頭を押しつぶしたときと，どうとかというようなことでやって，まあそういうことで。それから地域。拡大の問題ですね。地域それで。満洲に当時，張学良は既に逃げて，あそこで，熱河を根拠にして攪乱運動を盛んにやっとったんです。その例を引いて。そしたら，こういう質問をしたんです。それじゃあ張学良が北京まで逃げていったら，追っかけるかという。

衛藤：それも石井子爵でございますか。

荒木：石井さんです。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：追っかけるかと。満洲を攪乱するならば，それが南京に行こうが，どこに行こうが，どこにおろうが，満洲を攪乱するものは抑えなければ，日本の国防が立ちませんと。だから彼があそこを根拠としてやるならば，

北京はおろか，天津だろうが，南京だろうが，行かざるを得ないと，まあ答えたと。相当不平なような顔をしておったですよ。それで3，4日は収まったです。満洲事変の目的も，まあこれは計画してったんじゃないですからね。幸いそういう問題を出してくださったんで，それに対して，まあ自分の頭にあったことを言って，決めたと。

衛藤：なるほどなるほど。

荒木：そうすると，まあちょっと質問があったですけども終わって，終わったらあれですよ，渡辺千秋[44]さんね。渡辺千秋さん，これはもう支那が抗日及び排日の教育問題が含まれていると言って，これを直さなきゃいつまで経っても，始終教科書をもって説明をしとった人です。それで渡辺さんが立って，よく分かりましたと。今までなぜそうはっきり言ってくださらないのかと。ああ，結構ですと。その後はしっかりどうぞやって，誤りのないようにしてもらいたいと。まあ自然の助け船になったんですね。激励された。而して誰も，閣僚［のなか］に一言（いちごん）何言うものもなし。顧問官も［発言なし］。それでこの会議が終わったんです。

そこで私はもうこれを言った，枢密院で言った以上，御前で言ったんですからね，これを大方針とすると。内閣といえども，異論はできないですよ。それでまずその方針にして，これを国の問題に引き戻す。このなんですか，問題にするということの基礎はできて，爾来それでもって，そこまではやるんだと。急速にそれをやりたいと。それから上海事変が起こったんですよ。そのうちに片っぽの方の建国は，そこまでに行くと。そうすると建国で，今度は建国の方の問題に行ければ，それでまあ向こうでは，王道楽土でしょ。五族協和。そうまでしてそうであったんですよ。勅語[45]出たでしょ。3月10日ですよね。1日に，本当の式は3月，確か10日ですか，9日でしょ[46]。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：それで，ああいう風にやったと。その通りやれと。まあそれで全力挙げていったわけですよ。それが満洲建国の問題である。ところが今のように，人が変わりますわ。満洲の執権（ママ）の終わるまで，誰も責任の意志［を持つ者］もおらんと。それで満洲ができると，みんなうわーっとあそこにかぶりついて，失業者なにからあそこに出かけていったでしょ。まだ日本でちょっと邪魔になりそうなものをみんなあそこに。

衛藤：追っ払う。
荒木：やったという傾きがある。
衛藤：そうですね。
荒木：人の名前を言っちゃ，相済まんけれども，あの頃に行って，今お歴々して，岸［信介］[47] 君だってあのとき行ったんですかね。星野［直樹］[48] 氏。それから誰ですかな。商工省，大蔵省あたりが大分行ったでしょうね。
衛藤：行きましたですね。
荒木：そこで行ってみると，今度は新しいものがないということ，今度は駆け込み品になりますわ。政界に行われる，来るものになって，政界に生きていくとなると，利益関係が，権利関係，殊に財界問題では口銭のときですね。ここで嫌われ者があってですね，私だって何もこのファッショ主義のことをやろうとか，独裁的に共産的なやろうとする，自由主義でも良いでしょ。けれども当時考えてもらいたいと。あそこが固まってからで良いじゃないか。大分三井あたりの，三井，三菱あたりの進出を抑えたんです [49]。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：それが財界総スカンと。私は知らなかったけども，秋山定輔 [50] 君が，君，財界総スカンだからね，今度からこうしなきゃいかんなんとか言っておったです。そういうことでまあ，嫌われたかもしれません，当時。そういうことで，やっておって，満洲問題を捉えればですね，ようやく満洲問題が終わったと。昭和８年。
衛藤：それは８年とおっしゃいますのは，つまり塘沽停戦協定でございますね。
荒木：ええ，停戦協定。まあその，［5 月］31 日でしたか。
衛藤：そうだと思います。
荒木：それから連盟離脱が３月。
衛藤：３月。
荒木：これは連盟というものは，世間では非常に，満洲問題に対して軽く見ますがね，連盟が満洲問題の鍵であります。これと戦うのに，よほど考えねばならんと。相当苦心してですね，強くいってみたり，私若かったもんだから，国際間の利害関係でみんな純心なとき，来ておる手合い，

代表というものはみんな純心なよく分かるものと心得ておったですから，みんな各国は各国の利害関係を信じてますよ。

それに向かって，日本の理想を言うたんですよ。今でも笑われるけども，人からね。日本の乾坤はそもそもこうだと。人のものを盗るとか盗らんじゃないんだと。こういう信で，そもそも仁，博愛が基礎だと。正義の剣も振るうと。公明でなきゃならんという，三種の神器の喩えをあるとき，亀鑑で教え，それで乾坤を持っている日本だと。それから日本の意志というものをよく考えてご覧なさい。そんな怖いことはないんだと。

満洲事件もそうなんだと。それで私は昭和10，4年（正しくは昭和4年）に私が行った満洲の状態を。満洲の状態で驚いたのはですね，もうさっきお話したように一触即発でしょ。奉天郊外まで約1里，1時間。陸大の学生が一緒だったんですが。雨がちょうど降ってきたです。参加しかないから戦場に行くときは。

衛藤：吉岡［友愛］[51] 聯隊長戦死の場所ですね。

荒木：あそこに行くと，途中まで出かけていったときに雨がぽつぽつ降ってきて，そうすると支那人がね，そんなぼろは着てないんですよ。やっぱり花嫁のような着物を着て，路傍に寝ておる。雨がざーざー降ってきた。そこで起こしてやると。雨が降ってきたから，酒飲んで寝てるんだろうと。で，支那語の分かる学生が行って，寄ったところ死んでるんですよ。はあ，死んでますよ，死んでますよというわけです。それじゃあ，あそこに百姓が何か耕してるから，あれにいってやれと。ここに人が死んでるから，早く何か適当に。といってやったところが，その百姓がね，そういったすがら，ふっとこう見ましたらね，すました顔で。そいつは夕べ鶏盗りに来たから，たたき殺したんだと。それまでまだ良いですよ。そんなの片付けないかんじゃないかと，ここらへん。はあ，いや，3日置いておきなさいと。野良犬が来て，きれいに片付けてくれて，残るのは髪の毛，着物が残るくらいですよ。うっちゃっといて良いですよと言うんですね。

私は良い種（たね）だと思ってね。斯くの如き乱れた満洲において，如何にしたらこの治安がもつかどうか考えて欲しいと。理屈じゃないと。まあ，こういうことを表明して，国際連盟で。そういうことを知らずに満洲を

日本が盗ったんだ，満洲をどうすんだというから，違うと。流々仕上げをご覧なさいとまで，まあ言ったんです。今考えると［自分も］若いです。相手方（リットン調査団）はそんなことないですよ。どの法律に当てはめて，なんと申し開きができれば良いということをお使いに来てるんですからね。そうしたらやっぱり少し弁護士的なり，何か理論家のような風にして，そういう第何条，国際法何条によって，こういった，得意だったと。だから向こうはきょとんとした顔をして，荒木に会うといつも何か理想を，ちょっと訳の分からん理想を言ってるということで，済んでおったですよ。まあ若いから，よく言い聞かせりゃ分かるだろうと。まあいうことで，それは済んだ。

それが後に，我々が［1933 年］8 月ですね（長城線への撤収のことか），済んでから，8 年の 5 月以後。5 月の 31 日でしたよ（塘沽停戦協定成立）。で，6 月がね，ちょっと 1 ヶ月，いよいよこれから俺の本格のことをするんだと。

衛藤：なるほど。

荒木：で，6 月考えて。その間に私はもう，どうせ大勢はね，本当に維新ですよ。まあ理屈じゃないと。この青年層がこんな風だし。軍部もこんな風だし。上は信じないし。国際関係はこんなだと。だからここでもって一つ，日本の立場，抱負というものを世界に示す必要があると。それから国内においては，たくさん犯罪人が出て来ておると。例えば，右翼の方では，今の，三月事件もそうですよ，五・一五事件もあるんですからね。血盟団もあるし，それから神兵隊事件[52]が。神兵隊がその後です。ちょうど 8 年の 7 月かですか。

衛藤：ああ，そうでしたか。

荒木：そういうこともあるし。尋常一様じゃいけないと。そこで明治維新のときの明治陛下のお言葉にですね，御宸翰のなかに，億兆一人も其処を得ざれば，朕の罪[53]と。陛下が全責任をお持ちになってるんだと。こんな悪いいろんな悪い罪人ができたのに対しても，これは陛下の御責任と天皇がお考えなのは当然であると。それは輔弼が悪いからだと。それでこれを罪人として取り扱うのは，政治が悪いからここに至るんだと。そこでここでいわゆる本当の昭和維新，正味のある昭和維新をする。全部の大赦を行うと。朕の罪だと。朕その責めを負うと。お前らが悪かっ

たんじゃないと。

そこで大方針をお示しになると。日本の方針はこんなもんだと。だからお前らはガサガサガサガサして，小さな武器でもって，その犯罪になるようなことをするなと。という勅語を賜って，全部の大赦を。それは左翼も何も右翼もないです。共産党もよろしいと。あのとき共産党は相当捕まってますからね。全部出せと。経済犯も。で，ただ出してすぐに，それが自分の習慣になって，出ればすぐに人殺しをするというようなときは，保留する必要があると。そのほかは，もうみんな出すと。そうして，そういうこと（犯罪か）やっちゃならんのだと。これで本当の日本に帰れと。いうことで，そういう風に抱負を，日本の建国以来の抱負，そのときの抱負というものをお示しになる。

そうすると異論が出るのはですね，そんなことすると政治が乱れるという異論がよく出るんです。そこで次に出師追われて，いわゆる泣いて馬謖を斬るのはその次だと。ひとたびそうやってやったら，そのときはもう遠慮なく，総理大臣から何まで捕まる，一切峻烈な法をもってこれに臨めとすれば，前にそういうことをやっても政治が必ずしも乱れずに済むんじゃないかと。そうしなきゃもう収まりがつかん情勢に，私はあると判断したんです。

ところがこれは陛下の大権事項です。内閣でできない。それで［1933年］6月から7月にかけては，宮中の御模様をそれとなく知らにゃならん。幸い本庄［繁］[54] がおりました。本庄に，実はこういう肚を持っとるんだ，宮中の空気，そういうことができるかできないかを一つ，できなきゃどうしたらできるかということを一つ，それとなく頭に置いて。それでずっと何回か，あのときはあそこに行きますからね，葉山にちょうど，7月の最後ですし，陛下がおいでになったとき，天機も奉伺すると[55]。ところが内閣が，陛下は，これはもう後は分かってるんですがね，陛下は責任のあるものを御任免なっとると。その御任免になったことの意見はどんなことでもご採用になるんだと。だから［斎藤実］総理大臣が肚決めればそれは通すと。よしと。

すぐにそれがわかると，海軍大臣大角［岑生］[56] です。大角に話すと，大角もね，五・一五事件で非常に悩んでいるわけです。あの後の始末はもめましたからね。岡田［啓介］さんが妙な風に引っかき回しちゃって，

ガタガタもめたもんですから。それで大角に言ったら，ああ同意だと。それで大角と陸海軍大臣が袖を連ねて総理のところに行って，こうやってもらいたいと。総理はちょっと考えておったですがね。一つ研究させましょうと。

衛藤：斎藤。

荒木：斎藤実ですね。そうして堀切善次郎[57]があのときには書記官長です。最初，法制局長官で，あのときは確か書記官長です。先生を呼んで，研究せい。で，研究をします。で，この方は一応。あとは督促すれば良い。

それから今度は国策決定しなきゃならん。それは国際問題が多く含んでます。連盟から離脱して孤立してる状態ですからね。そこで国策決定をするのに，各省の意見をまとめなきゃならんと。それで部門を分けて，一番最初に，そのときに外務大臣がちょうど内田さんが代わって，広田［弘毅］が来た。内田さんが広田を推しておるんです。それで内田さんが辞めるときに，広田君が今度，俺も辞めるから，広田君が今度は良いだろうと。もちろん広田は若いときからよく知っとるから，結構だと。もう少し実は期待しとったんです。そこで五相会議を開くと。陸海軍，大蔵，外務，総理と。

衛藤：それは最初の五相会議[58]。

荒木：最初の五相会議。

衛藤：ああ，そうですか。五相会議という閣議以外に五相会議というものをつくって，発案は閣下で。

荒木：今のことで，総理に言って，五相会議をして，それで国防と外交の問題を決定，最初に決定したと，国際問題を。そこで陸海軍，外務，大蔵と，総理と。大蔵大臣は高橋［是清］さん。それでやったんです。

ここで広田にはすっかり私は，あんな男でないと思ったんですがね，さじ投げたんです。裏側からいろんなこと言われますがね。ああ軍部の言うことを聞いちゃならんとか，軍部を抑えよとか言われたとか言うんですが，それは分かりません。それが後，広田を総理に押し出していく一つの約束があったと。これはね，おそらくは忠節を，なんというか事件屋がそういう風に言ったんじゃないかと思いますが。私の期待には反したです[59]。

衛藤：ああ，そうですか。
荒木：私も非常に，これでもってしっかり腹を割って話ができると思うと。一向に受け答えがない。その会議で問題になったのは，陸軍ではないですよ，海軍です。当時海軍の方が非常にやっとったのは，ロンドン条約の廃止。ワシントン条約，ロンドン条約の廃止です。あれから1936年に改定になりましょう。
衛藤：そうでございます。
荒木：以来，1936, 7年問題[60]というのが，これから来るわけですよ。その問題に対して，海軍はどこまでも現状よりも有利に解決しなきゃいかんと。殊に潜水艦問題。これをここで約束しようと。外務省が。で外務は，それは先のことだと。今ここでもって外務省が1936年の条約改定期にそういう風にするとは約束ができないと。海軍は，これ（軍縮条約）がある限りには海軍の癌で，海軍の内部は収まらんというんで，このことは非常に言い合いになりましてね。我々はむしろオブザーバーとして立ち回ったんです。そんなものすぐに片付くと思ったんですよ。なかなか片付かない。それが9月から始まって，約1ヶ月。何回やったか，今は記憶してませんが。そうしてる間に，世間で新聞記者界が，軍部と外務省の意見が割れて，非常に対立しているということを，外に噂が出るようになった。
衛藤：なるほど。
荒木：それはまずいと。国際間，相手が見てくると，世界を。ここで割れとったら向こうがかなり突っ込んでくると。できるだけそれはしたくないと。
　そこで大演習です[61]。福井県。あそこは寒いもんですから，いつもより1ヶ月早い。10月の末が大演習です。ちょうど9月始めてから，10月のその頃になるまで，今のような状態であったんで，大演習せねばならんと。大演習に行くと，新聞記者がもううんと閣僚をつかまえて意見を聞きます。そのときに今のようにけんかの種を作っちゃいかんと。そこで仲作りをしようと。決定を盾にしてと。
　そこであのときコミュニケを出したんです[62]。そのコミュニケはきわめて2行か3行なもので，国際間の親善を害せざる範囲において国防を充実するとかなんていうような，どこ突っついたってかまわないものを

出して，一応打ち切って，そして大演習。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：大演習に行くと，案の定新聞記者が。それで私に向かって。まあ当時私を目標にして来るものだから，満洲事件も収まったし，国際連盟も収まった。この次は何するんですかと来たんです。
　ですから，根本だけをまあ話したんです。国策を決定して，その国策も国内の思想，それから内需の関係，経済問題，それで最も大きく今企図するのは，この後で企図しておるのは，国際連盟，満洲事件で国際孤立しているから，これを回復せにゃならんと。
　そこで国際会議を開くと。日本が提案をして，この国際会議においては，明らかに日本の立場を述べて，そうして提案の題目は，世界の平和会議を開くんだと。そのときは極東と言ったか，世界と言ったか分からんけど，新聞は極東と書いたり世界と書いたり。出先の新聞の発表ですからね。発表というか新聞の質問に答えるんです。
衛藤：東洋平和会議という言葉が当時の新聞にございますね。
荒木：東洋であったでしょう。それは例えば，もう応急でこれこれやった。それで外務省はこれに対して熱が上がる。あれはね，当時読売ですよ。読売か報知でしたかな[63]。外務省の当局談という題で，私もそれに対してすぐ後に，なんで軍部に対して今まで強そうなことを言って，急に何か平和会議なんて言ってると。どうかしたんだと。まあ，腰が抜けたと言わんばかりのことを書いて。そうして，あのときは白鳥［敏夫］[64] もあそこにおりましたからね。しかしあれがおったんですからね，広田が。そういうことを書いて。やったって来やせんと。そんな大それたことを言って，召集したって，誰がその会議に［来るだろうか］，そんな会議は成り立たないと書いてあるんです。否定をして。それがきっかけになって。それは私の構想が［問題視された］。
　そこで五相会議で，すべての国策を部分部分を決定して，これを国策として，私の頭はね，国策として，そして国会にたたきつけると。この次の国会，国策国会にしたいと。そこでその前には大赦しますからね。それにはその案ができれば，すぐに党首を呼んで，あのときは政友会の方は鈴木喜三郎[65] です。私はよく知ってますが，それにこれをやれと言ったらこれはもう同意すると。一方は誰だったか，若槻さんか誰か知

りませんけどね。若槻さんだったですかね。それで言った話すれば良いじゃないかと。そうして了解をして，修正するときは修正して，それで国会でこれに対しての論議をしっかりしてくれと。主としてそれに対するこちらの答えをすると。もっとも発表できないものもありますからね。国際関係。それからよく打ち合わせをしていて，いけなかったら，これ修正していくんだと。そして国会をそれでもってやっていって。で，ある程度の決定をしましょう。そうすると，国会と政府が一致した一つの国策になりますから，これは問題ないじゃないかと。政府がごちゃごちゃでは具合が悪いと。まあそういう頭に構想を持っとった。

それで議会の始まるまでに，これを決定したいと。それで帰ってきて，だから 11 月です。演習が済んで。まあ既にそういうことは発表してくれと。ところが私もノートが今残っていますがね，素案が。まあ自分の素案を作っときゃならんと。各省のことは，入れないですから。大体骨だけ書いて，こういう方向に行ってもらいたいと。できたらそいつを集めて，それで国策として内閣が決定して，代議士に党議に諮って，それで国会でそいつをお願いすると。それを世界に向かって全部，日本の抱負を，日本の立場があると。それにもう，怖い日本でもなきゃ，馬鹿にする日本でもないことがわかり合える。問題は平和だと。そういうときに今の国際連盟に，いったい国際連盟何をしてるのかと，第二国際連盟を作る必要があるというようなことを議会で言ってもなんでも良いですわ。

そういうことで，帰ってきたところが，11 月始めようとすると，農林相後藤文夫[66]君が辞職をすると言い出して。何だと言ったら，俺の所の予算は一つもとってくれないと，高橋さん。何にもできないから，俺は辞職すると。そんなにガタガタ言って辞職する，それを前からいろんなことあって研究しとるんだから，こんななか割れても困るんだと。どういう意味だと。殊に農村問題ならば，軍との関係を持つことに私は非常に興味を持っている。じゃあ，そいつを先に決定して，農林方面の方針を決定して，予算も決定すれば良いじゃないかと。それじゃあ，先にそれをやりましょうと。あとは内需をやるつもりだった。それで思想問題が入って，経済問題，治安問題が入ってきますよね。それで済んだら，もう一回前の外交などを持ってきて，それでだいたい決定。まあ，

それが決定すれば，こっちは素案を持ってますから，それを自分で修正して，これでもって閣議にかければ良いんじゃないかと，考えておったんです。

衛藤：その素案というのは，全く独力でお作りになりましたですか。幕僚をお使いになりましたか。

荒木：最初はね，ここに材料ありますからね，幕僚にやったら幕僚はたくさん案が出た。第一案，第二案。

衛藤：なるほど。

荒木：全部気に入らないです。やっぱりかっぱらいたい頭がある。

衛藤：ああああ。植民地ですね。

荒木：ええ。いろんな。まあとにかく，なんていえやあ，一つの，なんと言いますか，大陸進出政策ですからね。それを一応見まして，どうしてもいかんので，私自分の手で書いて，少々これはね，今考えてみると，現実からやっぱり離れているんです。こういう文句なんか，政治はまつりごとなり，とありますからね。今ではあんまり通らんでしょ。政治は祭事なりと。だから神様の気持ちを持って，政治をしなきゃいかんと。それで日本のこれはこれだからして，ことごとく処得るようにしなきゃならんと。共産党なんても［処得るように］。なんていうようなことも内示には書いたんです。それから，極東平和会議。具体問題で極東平和会議。そんなこと書いてありますがね。橘川［学］[67] はそれに，渡したか，渡したかもしれませんね。

衛藤：この皇国国策基本要綱[68] というのは，それでございませんでしょうか。

荒木：それかもしれません。ああ，そうですよ。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：ここに出てる。これです。緊急施策基本案[69] です。

衛藤：ああ，そうですか。ああ，緊急施策。こっちの方ですね。

荒木：それでいろんなものが出てきたんですけど，どれも気に入らないので，幸いみんなありますよ，その案が出てきたの。そのときそれはちょっとね，軍がやっぱりかっぱらいたいんだということになる恐れもあるんですがね。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：それで農林会議[70]を開いて。これは私と関係ないですけどね。ところが斎藤さんが，君が言い出したんだから，君も加われと。私が陸軍だけが入って，海軍が入らないとおかしくなりますよ。農村の人だって海軍からいくんだから。いやかまわんから。君が発案だから，君が出よと。これは実際，六相になるんですがね。後藤農林大臣と，それから肥料問題がありますからね，商工大臣。それから大蔵大臣。それから陸軍大臣。で，総理と。五相。それにオブザーバーとして，あれがくっついてきとるんですよ。各大臣を各省をゴロゴロとやった，すぐ出てくる，三土忠造[71]。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：彼は大蔵大臣の助手なりとして入ってきた。飼い主（高橋是清）がひきとって。
衛藤：そうですか。
荒木：ですから，ちょうど六相なんですけど。
衛藤：なるほど。
荒木：しかし［三土］先生は，大蔵大臣にくっついてきたということで，まあ来とった。
衛藤：そのとき鉄道大臣かなにかですか。
荒木：なにやってましたかね。
衛藤：はあ，そうですか。
荒木：で，やったんです。これはどんどんいって。高橋さんは後藤君を非常に嫌うんです。後藤君がね，あれをやったもんですからね，青年団長をやっとった，当時まだ。それで青年団から電報で高橋さんのところへ，ギャンギャンギャンギャンと電報をよくやってたですね。
衛藤：はあはあ。圧力かけるわけですね。
荒木：ええ。それは高橋さんが気に入らないです。
衛藤：はあ，なるほど。
荒木：なんだと。おどかすかと。それで後藤君をつかまえると，君は青年団長じゃありませんよと。もう立派な農林大臣なんだと。こんなにたくさんこうやって青年団からこうなんてこと言って，非常につむじ曲げたです。それで意見を引かない。それでまあ会議を開いて，毎日私，官邸で後藤君と会おうといろんな打ち合わせもして，後藤君のバックをし

て，農林大臣の主張をどんどんしたわけです。そのときに農林省の前に，これはもう私は潰したんですが，農林省減反案[72]です。米の相場を下がっとって困ると，農村。だから減反をして。操短と同じですわ。
衛藤：ほう。面白い案ですね。
荒木：よくやったですよ，当時も。
衛藤：ああ，そうですか。
荒木：耕地を縮小して，減産をするわけです。
衛藤：そうすると，他に何を作らせるんでございますか。
荒木：いやもう，作らんで。米は安いもんだ。それで米が上がると。もう当時ほとんど決定しとるんですよ。これ，当時新聞は減反減反，盛んに出とるです。それで，やると。今，私が当たり前から言うように，国内だったらまだ食えないでおる者がおるじゃないかと。そんなものやっとって良いじゃないかと。それからもう国際関係，いつ何が起こるか分からん状態じゃないかと。食うに困るんだと。減反絶対反対と。あと減反をしてやったってですね，手数がかかるだけで，桑畑を抜いて畑にするとかいうようなことになってくると，今度はまた養蚕だと言って，桑の元のままにはせんのですよ。
衛藤：そうですよ。
荒木：そこで案を出したのは，備荒貯蓄と同じです。籾貯蔵法案[73]。うんとこしらえて良いじゃないかと。政府が買い上げると。そうして貯蔵するなら，3年でも5年でも問題ない。それだけの金を出して買い上げとくと。いざというと，どうにもできる。毎年毎年天災費用たくさんあるんだから。とうとうこれが籾貯蔵法案決定して。それから乾繭ですね[74]。繭を干しちゃって。これはやっぱり貯蔵すると。貯蔵方法ですね。このときは1000万石と言ってたから，ちょっと大きかったです。1000万石も貯蔵，国内でせないかんと。それはね，個人，村，各自が，みんなも，私のところがただ一家ならば，5人おるならその3人分は籾でもって持っておると。そんなこと造作はないですよ。自分の所でつくったってですね，私の所によく作った，植木鉢であって，そいつを籾で置くとして，米は良いか悪いか別としても，じきに3合や4合たまりますから。それで買うとすれば，そのまま，
（テープ交換）

araki 58 0312 II_A
衛藤：いいですよ。
荒木:1トン90円台。それを農村の方では80円台にしてくれりゃあ良い。それで商工省がそこで入ってくるんですよ。で，商工大臣によると，肥料会社は下げられないという。そこで共有の問題が一つある。外国から輸入すると硫安から何から安いんですよ。それを輸入して対抗するぞと。困るんじゃないかと。我々も外国人と内地で産業を盛んにしてもらいたいんだというような議論がそこで出てくる。ようやく80円台に下ろして，これは片付いたと[75]。

それから公租公課の問題[76]。これはもうどうしたって農村に対して他のものと一緒の公租公課はできないんだと。それからまたして大いに振作もせにゃならんと。これもある程度色が付いた。公租公課，もう一つ何でしたっけね。

それからもう一つの問題は，五つあるんですが，籾，乾繭，それから肥料，公租公課，それから農民道場[77]を作る。この五つの問題。農民道場はもっと何もなかったかな。たった7万円の予算ですからね，当時。一つか二つしかできやしないんです。この問題が決定されて，大蔵省は「それならば」というんで，確か2000万円を出すというと。これだけが本当に実が入った決定。もちろんその前に動いたんですけども。1000万円の最初の300万円くらいかったでしょ。それで片付いて。それで12月が終わってしまったんです。

それで国会までにあと3週間しかないんです。この間に残っている一番大事な内治問題，内政問題。内務大臣，陸海軍も入るでしょう。それから商工省が入る。経済，大蔵省が入ったりして。そこで思想問題。そこで今度は英米かソ連かという問題がはっきりして，ここでひっくり返しちゃって。国防外交の問題で。初めてそこに食い入っていって。それがある限りには，英米に対してある程度の顔も必要だということになりまして，思想問題をきっかけにして，国内の問題もそうです。それから財界や何やの一つ反省も促すと。ただやっぱり大赦令出してますからね。財政関係だって。それで粛正……。うんと言えばですね。経済犯も全部出しますから。そういうことを決定して。それでもう残っちゃったでしょ，農林問題で。農林は後でも良かったんですけど。それで一月。私

はこれを決定し，これはもうその半年は全力を挙げましたからね。何もないから十分です。それができ上がったのちに，今度は軍備問題の軍の粛正問題に入って，これは一環ですからね。

そこでそのときは諒闇だったんですよ。誰か宮様が亡くなられて[78]，1月の儀式なしなんです。それで幸い，幸いというのは甚だ大層だけれども，そういうことであったんで，元日だけ方々まわってしまえば，あとは儀式なしです。そこで元日まわったらば，元日の晩から東京ではだめだから，4日まで，4日が御用始めなんですよ，2日，3日，この2日にしっかりその案を練って，そして4日から内政会議を開いて，10日間くらいできるだろうと，あとの整理をすると，国会まで間に合うと。これは非常な大それた考え方か知らんけど，一所懸命になってですね，それで秘書官をどこかで探してくれと選定を出した。その選定が，この間行ってみたんですが，あんな温泉に人が行くかと思うような。畑毛温泉と言います。ご承知で。

衛藤：函南で降りて，熱海の上の山の中で。

荒木：ええ。ぬるい。あそこを選定しとって。なぜかというと，景観が良いそうですね。周りが何もなくて殺風景。ヘンテコな客がないと。それでここを選定して。よろしいと。そこで2日間。

衛藤：その頃，宿屋があったことはございましたか。

荒木：あったんですよ。

衛藤：ああ，そうですか。

荒木：それを選定して，秘書官も行っているんですよ。元日。まあ用はないですけどね。そして2日［間］出張して帰ってくる。それで2日私は行って。そして楽しみにして，それで畑毛温泉というのを，行ったことないんですが，この間初めて，去年行ってみたんですが，ぬるい湯で，あまり。なんと言いますか。相当湯はあったようですけどね。そこを選定して，それで正月ずっと方々を歩いて，酒を相当頂戴したし。

それで5時頃に帰ってくると頭が重いんですね。飲み過ぎたかと思って。しからば風呂へ入ろうと，風呂に入って寝たらば。風呂に入ったところが，出てくると熱がぐっと出てきて，それから医者に。その晩はそれで済んだ。翌朝熱が引かない。畑毛温泉行くどころでない。それから医者が来て診ると，肺炎だと。痰かなにかこう，桃色の痰かなにか出た

んですよね。肺炎だと。これはもう行っちゃいけないと。それはお流れになって。

それからずっと3週間ですかね。18日。なかいったん非常に危険だったそうです。それは7日頃ですね。もう布団をこう上げる力もないですね。しかしそのときは良い気分なんですよね。実に良い，自分が雲にでも乗ったようでね，悟りを開いたと自分で思ったくらいですよ。それはもう。聞いてみると，それは一番危険期。7日でしたかね。それから逐次それは収まって。11日にピシャーって熱が落ちて，10日目に。それから医者は非常に大事になさる。それは確かにそうで。高熱のときにあとを抜くと心臓麻痺になって。血管の中に血が固まるんです。それで血管の周りにちょっとくっつくんです。それをしばらくおいておけば，ずっと［血を］吸収してしまうんです。その瘤ができてやったときに，血行を盛んにするとですね，それが洗われて血管の中を通るんですよ。それで心臓に行って，ピャッと心臓を塞いじまうんですよ。ですから高熱の後は何時間ですか，何日か絶対に安静にしなきゃいかんそうです。初めてはそのときそうしたんです。それまでちょっと面会したって会えたんですけど，寝ておって顔を見るくらいですけど，一切家族以外誰も入れないと。

そして1月18日に，起きてご覧なさいと。5分ばかり試しに座ってごらんなさいと。座ったんです。急に脳貧血ですよね。気持ち悪くなったんです。それから医者に，まだ5分になりませんかと言ったら，顔色が悪い，気持ち悪いですかと。どうも気持ちが悪いと。いやもう，ただ試験してみただけだ。おやすみなさいと。そのときはずっと，ほとんど1週間でもう熱は下がっていたんです。頭ははっきりしています。そこで悲観したんです。それからすぐにこの案は内閣に行っているんですからね。内閣は何もしていない。農林大臣はどうしたって。農林大臣も自分のことそれだけで，後のことは何もかまわんと。2000万円出したかと言ったら，2000万円はどうとかして出ることが決まったと[79]。その方は済んだと。これが私の辞職の原因なんです[80]。

衛藤：ああ，そうですか。

参考文献

辞典類

外務省外交史料館日本外交史辞典編纂委員会編『日本外交史事典』山川出版社，1992 年。

近代中国人名辞典修訂版編集委員会編『近代中国人名辞典（修訂版）』国書刊行会，2018 年。

国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』吉川弘文館，1979–1997 年。

秦郁彦編『日本陸海軍総合事典（第 2 版）』東京大学出版会，2005 年。

福川秀樹編著『日本陸軍将官辞典』芙蓉書房出版，2001 年。

伝記・回顧録・研究論文・著作

「座談会　満洲事変 30 周年」『外交時報』第 990 号，1961 年 9 月。

『秘められた昭和史』〈別冊知性 5，12 月号〉河出書房，1951 年 12 月。

荒木貞夫著・有竹修二編『荒木貞夫風雲三十年』芙蓉書房，1975 年。

伊藤隆・柴崎力栄・季武嘉也・照沼康孝・山室建徳編『本庄繁日記　昭和 5 年 1 月～昭和 8 年 12 月〈近代日本史料選書 6-2〉』山川出版社，1983 年。

臼井勝美『満州事変　戦争と外交と』〈中公新書〉中央公論社，1974 年。

臼井勝美『満洲国と国際連盟』吉川弘文館，1995 年。

王慶祥編著『溥儀年譜』群衆出版社，2017 年。

大蔵省昭和財政史編集室編『昭和財政史』第 3 巻，東洋経済新報社，1955 年。

大豆生田稔『近代日本の食糧政策　対外依存米穀供給構造の変容』ミネルヴァ書房，1993 年。

緒方貞子『満州事変　政策の形成過程』〈岩波現代文庫〉岩波書店, 2011 年。

北博昭編『東京裁判　大山文雄関係資料　十五年戦争極秘資料集⑤』不二出版，1987 年。

北岡伸一『政党から軍部へ　日本の近代 5』〈中公文庫〉中央公論新社，2013 年。

橘川学『嵐と闘ふ哲将荒木』〈『陸軍裏面史・将軍荒木の七十年』の下巻〉荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955 年。

宮内庁『昭和天皇実録』第六，東京書籍，2016 年。

小林龍夫・島田俊彦解説『現代史資料』7，みすず書房，1964 年。

斎藤子爵記念会編『子爵斎藤実伝』第 3 巻，斎藤子爵記念会，1941 年。

佐々木隆「荒木陸相と五相会議」『史学雑誌』第 88 巻第 3 号, 1979 年 3 月。

桜田倶楽部編『秋山定輔伝』第三巻，桜田倶楽部，1982 年。

佐藤元英『昭和初期対中国政策の研究』原書房，1992 年。

参謀本部編『満洲事変作戦経過ノ概要』巌南堂書店, 1972 年（1935 年原刊）。
暉峻衆三『日本農業問題の展開』下，東京大学出版会，1984 年。
中村宗悦『後藤文夫　人格の統制から国家社会の統制へ』日本経済評論社，2008 年。
日本農業研究会編『日本農業年報』第 4 輯，改造社，1934 年。
野本京子『戦前期ペザンティズムの系譜　農本主義の再検討』日本経済評論社，1999 年。
秦郁彦『実証史学への道　一歴史家の回想』中央公論新社，2018 年。
原田熊雄述『西園寺公と政局』第 2 巻，岩波書店，1950 年。
山室信一『キメラ　満洲国の肖像　増補版』〈中公新書〉中央公論新社，2004 年。

校註

1）荒木貞夫（1877–1966）。満洲事変前後における荒木の略歴は，次の通り。1928 年 8 月，陸軍大学校校長。1929 年 8 月，第六師団長。1931 年 8 月，教育総監部本部長。同年 12 月，犬養毅内閣で陸軍大臣。1933 年 10 月，陸軍大将。1934 年 1 月，陸軍大臣を辞し，軍事参議官。1935 年 12 月，男爵。1936 年 3 月，予備役。

2）兎内勇津流・松重充浩「荒木貞夫の口述記録――シベリア出兵」『近代中国研究彙報』第 42 号，東洋文庫，2020 年 3 月。

3）1931 年 10 月 8 日，関東軍が錦州の爆撃を実施。満洲事変勃発後，若槻礼次郎内閣は事件の不拡大，早期収拾を意図した。しかし関東軍は政府の動向に不満を持ち，10 月 4 日，張学良の満洲帰還を否認する方針を発表。同月 8 日の爆撃および機銃掃射により 16 人が死亡，20 人以上が負傷したと中国外交部は発表した。

4）南次郎（1874–1955）。1931 年 4 月，宇垣一成の辞任を受け，第二次若槻礼次郎内閣の陸相に就任。同年 9 月の満洲事変に際し，現地軍に追随して事件を拡大。12 月に陸相を辞任して軍事参議官。皇道派からは宇垣の後継者と見なされ攻撃されていた。

5）大山文雄（1882–1972）。1904 年に日本大学専門部正課を卒業し，同年，判検事登用試験に合格。翌 1905 年 3 月，理事試補（実務修習中の陸軍法務部将校）へ転籍，留守第 11 師団法官部員。関東軍法務部長。このとき柳条湖事件の現場検証を行う。1933 年 11 月，陸軍省法務局長に任ぜられ，陸軍高等軍法会議補佐官に補せられた。

6）おそらく衛藤は，満洲事変を引き起こした人物を問おうとし，石原莞爾の名前を挙げたのだが，このとき荒木は，東京裁判において満

洲事変が日本側の犯行として「認定」されたことを問題視しており，「認定」に至った経緯を述べるにあたって，大山文雄の名前を挙げたのであろう（註 7 も参照）。

7） 1947 年 4 月 9 日の極東国際軍事裁判において，大山文雄は弁護側の証人として柳条湖事件の現場検証について述べた。このとき大山は「南満洲鉄道爆破状況調査書」（1931 年 9 月 23 日調製）の写しを弁護側に提出しており，法廷において弁護人がそれをほぼ全文読み上げた。この調査書では結論として，「右調査ニヨリ前書ノ鉄道線路ヲ爆破シタルハ支那兵員カ爆薬物ヲ用ヒテ之ヲ破壊シ我カ鉄道守備兵ニ発見セラレ交戦シツヽ北大営方面ニ退却ノ際守備兵ノ迫撃ニ依リ受傷戦死シ屍体ハ其ノ儘現時ニ及ヒタルモノト認ムルコトヲ得タリ」としている（北博昭編『東京裁判　大山文雄関係資料　十五年戦争極秘資料集⑤』不二出版，1987 年，120 頁）。この後，法廷において大山は検察側から厳しい追及を受けることになる（「極東国際軍事裁判速記録」第 192 号）。なお，このとき荒木は被告として法廷にいた。

8） 秦郁彦（1932–）。1951 年，東京大学入学。1956 年，東京大学法学部卒業。同年大蔵省入省，1976 年退職。その後，プリンストン大学客員教授，拓殖大学教授，千葉大学教授，日本大学教授を歴任。1953 年から旧軍人へのヒアリングを始めるが，荒木へのヒアリングも同年 9 月から翌年 1 月にかけて 5 回行っている。

9） 平田幸弘（1880–1951）。満洲事変時の歩兵第 29 聯隊長。

10） 島本正一（1887–1967）。1931 年 8 月，独立守備歩兵第 2 大隊長。

11） 花谷正（1894–1957）。1930 年 8 月，関東軍司令部付（奉天特務機関）。

12） 片倉衷（1898–1991）。1930 年 8 月，関東軍参謀部付。1931 年 10 月，関東軍参謀。「満州事変機密政略日誌」を残した。

13） 『秘められた昭和史』〈別冊知性 5, 12 月号〉（河出書房, 1951 年 12 月，40–50 頁）に，花谷正「満洲事変はこうして計画された」が掲載された。関東軍において柳条湖事件の計画が議論され，それが実行に移されるまでの過程を回想した。執筆の経緯について秦は，「昭和三十一年，私が『別冊知性 5　秘められた昭和史』を企画したさい，手記として発表するよう交渉し，私が聞き取りを下書きして，花谷氏がそれに手を入れた」としている（秦郁彦『実証史学への道』中央公論新社，2018 年，201 頁）。

14） 今田新太郎（1896–1949）。1929 年 3 月, 参謀本部付仰付（支那研究員・奉天駐在）。

15） 荒木が聞いたのは，片倉衷の証言であると推測される。片倉衷は『外交時報』（第 990 号, 1961 年 9 月, 39 頁）における座談会のなかで,「九

月十八日の事件」について，「私はいつかお話ししたかと思うのですが……。［中略］石原さんも板垣さんも計画の中心人物ではあるけれども，直接やったのは今田新太郎大尉以下の仕事です」と述べている。

16） 橘川学『嵐と闘ふ哲将荒木』（荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955 年）によると，荒木は現地から戻った河本大作と一夕の席を設け，河本が事件の真相を述べようとしたところ，「万事を大局から観察し，自分に直接関係のない事柄や又公私共秘密に関する事項については決して単なる好奇心に駆られて深く問い糾すべきではない」という態度のもとで，それを拒んだという（89 頁）。満洲事変関係者への聞き取りに対し，荒木が否定的な態度を取っているのにも，この発想が影響していると推測できる。

17） 1927 年 4 月，憲政会の若槻礼次郎内閣が総辞職し，田中義一内閣が成立する。その後，同年 6 月 1 日，憲政会と政友本党とが合同して，立憲民政党を結成。総裁は浜口雄幸。

18） 1928 年 9 月，峯幸松憲兵司令官が奉天に派遣され，3 週間にわたる調査が行われた。峯は関東軍からは新たな証拠を入手できなかったが，帰途立ち寄った京城で得た情報から河本大作が事件を指導したことを確認した。

19） 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』では，「昭和四年三月には，戦史旅行で校長自ら学生を率い満洲に渡り，日露戦役当時に於ける皇軍勇戦の跡を経巡つたのである」と記述されている（103 頁）。

20） 1931 年 11 月 27 日午前 11 時及び午後 12 時 20 分，軍中央は関東軍に電報で遼西（遼河西方）地区への進出の中止を命じた。既に混成第 4 旅団は遼西に進出し青崗子附近で戦闘中であったが，同日午後 8 時に関東軍は混成第 4 旅団に遼河以東に後退することを命じた。

21） 奉天近くの「～崗子」としては，蘇崗子（そこうし），青崗子（せいこうし）がある。

22） 1931 年 11 月 15 日からの連盟理事会では，日本側の提案に基づき満洲への視察団派遣が議論され，12 月 10 日に決議案は可決した。このとき芳澤謙吉代表は決議案受諾に際し，日本軍の満洲各地における「匪賊，不逞分子」の討伐権を留保する。その後，満洲における日本軍の行動は匪賊討伐を理由に行われた。

23） 室謙次（1876–1966）。1930 年 8 月，第二十師団長。

24） 石井菊次郎（1866–1945）。1890 年 7 月に帝国大学法科大学法律学科を卒業し，外務省に試補として入る。1915 年 10 月，第二次大隈重信内閣の下で外相就任。1917 年 11 月，特派大使としてアメリカにおい

て，いわゆる石井・ランシング協定に調印し，中国における日本の特殊権益を認めさせた。1927 年 12 月，退官。このときは枢密顧問官。

25） 1932 年 3 月 9 日，満洲国で政府組織法及び国務院をはじめとする各部局官制が公布された。満洲国の中央政府は立法院，国務院，法院，監察院の四院で構成される。

26） 于冲漢（1871–1932）。張作霖のブレーンとして「保境安民」（東北地方を安定させ地方自治を目指す）を掲げていたが，張学良政権の下では疎外されていた。1931 年 9 月 24 日に組織した奉天地方自治維持委員会では副委員長を務め，1932 年 3 月に満洲国が建国すると，監察院院長に就任するが，同年 11 月に没する。

27） 熙洽（1884–1952？）。満洲事変の際には，吉林省政府委員として不抵抗主義を堅持し，吉林に日本軍を迎え入れる。日本側の独立勧告を受け入れ，9 月 28 日に吉林独立を宣言。1932 年の満洲国建国では，財政部総長（のち大臣）兼吉林省長となる。

28） 内田康哉（1865–1936）。第二次西園寺公望内閣及び原敬内閣において外相に就任。枢密顧問官を経て，1931 年に南満洲鉄道総裁となる。このとき柳条湖事件に遭遇し，関東軍をはじめとする「現地の空気」に同調し，本国へ積極策採用を意見具申した。翌 1932 年に斎藤実内閣の外相に就任する。なお荒木とは，荒木貞夫・内田康哉述『非常時教本』（趣味の教育普及会，1933 年）を出版している。

29） 閑院宮載仁親王（1865–1945）。伏見宮邦家親王の第 16 子として生まれる。1872 年に閑院宮家を継承。1877 年に陸軍幼年学校に入校した後，日清・日露戦争にも出征。1912 年 11 月，大将に昇進すると軍事参議官に移り，1919 年に元帥の称号を受ける。1931 年 12 月に荒木貞夫が陸相に就任すると，皇道・統制両派の派閥抗争を中和するため参謀総長に任命される。実際には閑院宮は皇道派を嫌い，真崎甚三郎教育総監更迭の原動力となった。

30） 1931 年 10 月に発覚した，橋本欣五郎ら参謀本部第二部の桜会急進派によるクーデター未遂事件。第二次若槻礼次郎内閣の不拡大方針を受けて，橋本ら桜会急進派は事変拡大のための最後策としてクーデターを企図した。計画では，10 月 24 日に首相・閣僚らを殺害し，荒木貞夫を首相兼陸相とする新内閣を実現する予定であった。10 月 17 日に橋本らは憲兵隊に検束される。

31） 1932 年 1 月 8 日，陸軍始観兵式から帰る途中の天皇の行列に朝鮮人李奉昌が手榴弾を投げ込んだ事件。宮内大臣の馬車の車体に軽微な損傷があったのみで負傷者はなく，李奉昌はその場で警護の警察官・憲兵に逮捕された。同日，犬養毅内閣は総辞職することを決め，犬

養首相が参内して閣僚の辞表を奉呈したが，翌 9 日に天皇は犬養に留任を求める優諚を下し，結局犬養内閣は全閣僚が留任した。

32） この間，荒木と衛藤とのあいだで桜田門事件をめぐる応答があったが，荒木が事件の名称をすぐには思い出せなかったことから，両者のあいだで事実確認に関する混乱が生じていた。このやりとりに荒木の回顧は含まれていないため，本稿では割愛する。

33） 真崎甚三郎（1876–1956）。1929 年 7 月，東京の第一師団長。この直前に，陸大卒将校を中心に一夕会が結成され，荒木貞夫･真崎甚三郎･林銑十郎の三将軍を推戴し陸軍を建て直すことが申し渡された。1931 年 8 月，台湾軍司令官に転じたが，1932 年 1 月，荒木貞夫陸相の推挙で参謀次長に就任。参謀総長閑院宮載仁親王に変わって参謀本部を主宰した。1933 年 6 月，大将昇進に伴い参謀次長を退任，軍事参議官となる。1934 年 1 月，荒木陸相の後任に擬せられたが，閑院宮の反対に遭い，教育総監兼軍事参議官となった。

34） 1931 年 11 月 10 日，溥儀は天津を脱出。同 13 日に営口に上陸し，湯崗子のホテルに泊まる。同 25 日前後に旅順へと移り，大和ホテルに隔離され，数日後に粛親王の家に移った。翌 1932 年 3 月 8 日，溥儀は長春に入り，同 9 日に満洲国の執政に就任した。

35） 四元義隆（1908–2004）。東京帝大を中退し，安岡正篤の金鶏学院に入る。のち井上日召に傾斜。1932 年の血盟団事件では牧野伸顕暗殺未遂で懲役 15 年。1940 年恩赦で出獄。

36） 1932 年 2 月 9 日に小沼正が前蔵相井上準之助を，同年 3 月 5 日に菱沼五郎が三井合名会社理事長団琢磨を殺害する事件が起きた。井上日召の薫陶を受け，暗殺の命令を受けた被告たちを，血盟団と呼ぶようになる。血盟団には，茨城県那珂郡の農村の青年，東京帝国大学の学生，京都帝国大学の学生が参加していた。

37） このとき荒木は第六師団長として熊本に駐在。

38） 1931 年春, 桜会の急進派と陸軍首脳部によって企てられたクーデター未遂事件。クーデターにより宇垣一成内閣を樹立して国家改造を進めることが計画されていた。

39） 杉山元（1880–1945）。1930 年 8 月，中将・陸軍次官。

40） 久原房之助（1869–1965）。1928 年 2 月，久原工業を義兄鮎川義介にゆだねで実業界を退き，山口県から衆議院議員に当選，同年 5 月，田中義一内閣の逓信大臣に就任。1931 年 3 月には立憲政友会幹事長，第二次若槻内閣末期に協力内閣運動を展開し，犬養毅・鈴木喜三郎らと疎遠になり，久原派を形成。政民連携論を唱え，一国一党を主張，

軍・右翼と関係深くなった。

41） 安達謙蔵（1864–1948）。1927 年の民政党が成立すると，同党総務。1929 年成立の浜口内閣では内務大臣，1931 年成立の第二次若槻内閣に留任。同内閣末期には，政友会との協力のもとに挙国一致内閣を提唱したが，閣内の反対論が強く，これがきっかけとなって若槻内閣は崩壊。

42） 東四省は黒龍江省・吉林省・遼寧省・熱河省を指す。

43） 有竹修二編『荒木貞夫風雲三十年』（芙蓉書房，1975 年）では「大福餅」。

44） 渡辺千秋は 1921 年に死去。江木千之の誤りか。前掲『荒木貞夫風雲三十年』及び前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』においても，江木の発言として記述。ただし，「枢密院会議筆記」及び「倉富勇三郎日記」には記載なし。江木千之（1853–1932）。1924 年 1 月，清浦奎吾内閣文部大臣となり，同年 6 月内閣総辞職後，枢密顧問官に任ぜられる。この間，多数の民間団体の役員を歴任。

45） 満洲国「建国宣言」のことか。1932 年 3 月 1 日に発表される。順天安民，民本主義，五族協和，王道主義などを建国理念とする。

46） 1932 年 3 月 9 日，満洲国の建国式典が開催される。

47） 岸信介（1896–1987）。1920 年，東京帝国大学を卒業，農商務省に入り，1925 年に同省が農林・商工両省に分離すると，商工省に進んだ。1936 年満洲国実業部次長に就任。実質的に経済政策の最高責任者となる。終戦直後，A 級戦犯容疑者として逮捕されるが，起訴されずに釈放。1957 年 2 月に内閣総理大臣就任。

48） 星野直樹（1892–1978）。1917 年，東京帝国大学法科大学政治科を卒業し，大蔵省に入る。1932 年，満洲国財政部総務司司長に転じ，陸軍と協力して満洲国の建設に尽力。1936 年に財政部次長，同年さらに国務院総務庁長，1937 年に総務長官に就任し，1940 年 7 月まで在職。終戦時には A 級戦犯容疑者として逮捕され，東京裁判で終身刑の判決を受ける。1955 年の釈放後，東京ヒルトン = ホテル副社長，東急国際ホテル社長，ダイヤモンド社会長，旭海運会社社長などを勤める。

49） 前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』及び前掲『荒木貞夫風雲三十年』によれば，1932 年 4 月末，満洲国の借款 3000 万円を三井・三菱が引きうけることを決定し，それを荒木のもとに持参したが，閣議で大蔵省も借款を引きうけることになっていたため，荒木は三井・三菱の申し出を断った。そして荒木は三井・三菱に大蔵省に相談することを勧め，結局 3000 万円は大蔵省が受け取ったという。

50） 秋山定輔（1866–1950）。1893 年に『二六新報』を創刊。1930 年代に

は荒木や真崎甚三郎とも懇親な間柄であった。

51） 吉岡友愛（1862–1905）。1905 年 1 月，歩兵第 33 聯隊長。1905 年 3 月 7 日に奉天付近で戦死。

52） 1933 年 7 月に生じた，民間の右翼を中心としたクーデター未遂事件。斎藤内閣を打倒し，皇族総出内閣を出現させようと企図した。

53） 正確には，「億兆一人も其処を得ざる時は皆，朕の罪」。1868 年 3 月 14 日，五箇条の誓文と同時に発せられた「億兆安撫国威宣揚の宸翰」のなかの文言。

54） 本庄繁（1876–1945）。1931 年 8 月，関東軍司令官に就任。その直後に柳条湖事件が起こる。1932 年に軍事参議官。1933 年 4 月 6 日に侍従武官長。荒木ら皇道派と密接な関係を築く。

55） 1933 年 7 月 26 日，葉山にて荒木が天皇にご機嫌伺い。

56） 大角峯生（1876–1941）。1931 年 12 月, 犬養毅内閣の海軍大臣に就任。翌年 5 月，五・一五事件の責任を負って辞職。1933 年 1 月，再び斎藤実内閣の海軍大臣に就任，1936 年 3 月まで在任。

57） 堀切善次郎（1884–1979）。東京帝国大学卒業後，内務省に入る。1925 年に神奈川県知事，1926 年に復興局長官，1929 年に東京市長，1930 年に拓務次官となる。1932 年 5 月，斎藤実内閣の法制局長官に就任，1933 年 3 月，内閣書記官長に転じ，1934 年 7 月に退任。1933 年 12 月に貴族院議員に勅撰され，1946 年 5 月まで在任。

58） 1933 年 10 月 3 日に開催。なお第 2 回は 10 月 6 日，第 3 回は 10 月 10 日，第 4 回は 10 月 16 日，第 5 回は 10 月 20 日。

59） 五相会議においては，特に対ソ政策めぐり陸軍と外務省との間には意見の相違が見られた。陸軍はソ連に対して強硬な姿勢を有し，それに基づく軍備増強を志向したが，外務省はそれを否定し，最終的に第 5 回の五相会議，及びその翌日の臨時閣議においても，荒木の要求が容れられることはなかった。

60） 1935, 6 年の危機のこと。ワシントン・ロンドン両海軍軍縮条約の期限満了となる 1936 年末には，アメリカの新艦の建造も進み，対米比率が低下して国防に不安が生じると主張されていた。

61） 1933 年 10 月 24 日から同 27 日まで北陸で行われる。

62） 1933 年 10 月 30 日の五相会議終了後，以下の公表を行った。「五相会議ニオイテハ外交・国防・財政ノ調整ノ根本ニ官シテ隔意ナキ意見ノ交換ヲ遂ゲタル結果相互ノ諒解ヲ深メツツ大綱ニ関シ意見ノ一致ヲ見タリ」。そして，翌 21 日の臨時閣議では，以下の申し合わせが承認され，発表された。「第一　国際関係ハ世界平和ヲ念トシ外交手

段ニヨツテ我ガ方針ノ貫徹ヲ計ルコト。第二　国防ニ関シテハ他国ヨリノ脅威ヲ受ケズ外侮ヲ蒙ルコトナキヲ期スルトトモニ我ガ国力ニ調和セシムルニ留意スルコト」。

63）『読売新聞』（1933 年 10 月 30 日朝刊）には，「関係各国を招請し東洋平和会議を開催　荒木陸相の重大提唱」と題した記事が掲載された。記事中で荒木は「吾輩は東洋平和会議を開催してその会議において日ソ不可侵条約，軍縮会議の予備商議を始め平和維持に関係ある総ゆる問題を根本的に協議しそれによつて承認することがよいと思つてゐる，茲にはじめて国際聯盟脱退の意義も明かとなり列国に若し不平があらば日本の真意を諒解し当然満洲国を承認することにもならうと信してゐる」と述べた。一方で同紙には,「『極東モンロー主義』を自ら放棄するもの　今更ら意外　外務当局反対」と題した記事も同時に掲載され，外務首脳部の談として，「東洋平和会議開催説は先般来陸軍の一部に提唱するものがあり当時外務，軍部聯絡会議の話題ともなつたがその時既に一顧の価値なしとして葬られたもので今更ら荒木陸相がこの検討ずみの問題を蒸返すなど真実とすればその真意奈辺にあるか諒解に苦しむところである」という意見が掲載されている。

64）白鳥敏夫（1887–1949）。1930 年，外務省情報部長に就任。政友会の森恪や陸軍の鈴木貞一と協力して国際連盟脱退を主唱。1933 年，スウェーデン公使に任じられ，9 月 20 日に離日。外務省革新派のリーダーであり，少壮外交官のあいだからは白鳥の次官擁立運動が生まれた。

65）鈴木喜三郎（1867–1940）。1891 年，東京帝国大学法科大学仏法科を首席で卒業後，ただちに司法界に入る。1924 年 1 月，清浦奎吾内閣司法大臣に就任するが，同年 6 月に内閣総辞職となり，辞任。1925 年 4 月，立憲政友会入党。1927 年 4 月には田中義一内閣の内務大臣に就任するも，1928 年 5 月に辞任。1931 年 12 月，犬養内閣の司法大臣に就任し，1932 年 3 月，内務大臣に転じる。犬養首相が五・一五事件で暗殺されると，立憲政友会総裁に就任したが，首相就任は叶わなかった。

66）後藤文夫（1884–1980）。1908 年，東京帝国大学法科大学卒業後，内務省に入る。青年団運動を推進し，1930 年には日本青年館・大日本連合青年団理事長に就任。同年，貴族院議員に勅撰。平沼騏一郎の国本社に関係し，安岡正篤らの金鶏学院の後援者の一人となり，1932 年の国維会の結成にあたって発起人・理事として尽力した。1932 年 5 月, 斎藤実内閣の農林大臣に就任。荒木陸相と組んで「革新」

政策の推進にあたり，産業組合の拡大発展につとめた。1934 年 7 月，岡田啓介内閣の内務大臣に就任。

67） 橘川学。1910 年，秋田県生まれ。報知新聞記者時代に荒木に師事し，荒木の推薦で 1942 年に朝日新聞へ転じる。陸軍省並に内務省嘱託兼務。戦後は追放され，素浪人に。『嵐と闘ふ哲将荒木』（荒木貞夫将軍伝記編纂刊行会，1955 年）著者。

68） 「皇国々策基本要綱」。1933 年 10 月 3 日の五相会議にて示す。前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』，262 ～ 263 頁。

69） 「緊急施策基礎案」。斎藤実宛て書簡（1934 年 1 月 20 日）に添付されたもの。前掲『嵐と闘ふ哲将荒木』，293 ～ 297 頁。荒木が述べたように，「我国の政治は，祭事也」という文言があるほか，「極東平和会議」の開催，また五・一五事件や血盟団事件の関係者の恩赦などを提案している。

70） 1933 年 11 月 7 日に第 1 回が開催され，12 月 22 日まで全 8 回が開催される。内政会議とも呼ばれた。元々は内政問題を議論する会議を開催するつもりであったが，実際には農村問題の議論に終始した。この会議では，農村に対して厖大な予算措置を伴う政府主導の積極的救済策実施を求める後藤農相と，健全財政主義の立場から農村の自力更生を説く高橋蔵相・三土鉄相が対立し，荒木は後藤を側面から支援しようとした。会議の結果，一，農民精神の作興，二，農村協同組織の徹底，三，農家負担の軽減，四，重要肥料の統制，五，蚕糸対策の 5 項目からなる覚書が作成された。

71） 三土忠造（1871–1948）。1908 年に衆議院に当選し，以来 1937 年まで連続 11 回当選。立憲政友会所属。1921 年 11 月から 1922 年 6 月まで高橋内閣の内閣書記官長を務める。1927 年 4 月に田中義一内閣の文部大臣に就任，高橋是清辞任後に同年 6 月から 1929 年 7 月まで大蔵大臣となる。1931 年 12 月に犬養毅内閣の逓信大臣，1932 年 5 月に斎藤実内閣の鉄道大臣に就任。戦後の内務大臣を外せば内閣書記官長以降すべて高橋是清の補佐役として大臣になったといえる。

72） 1933 年に米穀統制法が制定された直後から，農林省米穀部（1932 年 6 月に新設）は「生産統制」の検討を開始し，1933 年 9 月に「臨時米穀作付減少試案」（「減反案」）が公表された。これは減産によって米価維持を実現する構想であったが，農林省内部のみならず他省からの反対（陸軍省は「国防上」の理由から反対）も招き，「減反案」は立案段階で挫折するに至った。

73） 「米穀貯蔵奨励規則」（1932 年 11 月制定）に基づく籾貯蔵案のこと。

農家に自治的に籾貯蔵させ，金利・保管料・運賃に対して政府が助成し，米価が標準最低価格より一割以上騰貴したとき貯蔵籾の売却を認めるなどを内容としていた。

74） 蚕糸対策の一つとして，乾繭取引の普及が唱えられた。

75） 農産物の生産費を低減させるために，良質廉価の重要肥料を供給することが求められ，重要肥料の統制によって適当な方策を講じることになった。

76） 農家の公租公課の過重が農村窮乏の原因であるとして，一般税制の改正，地方財政との調整及び地方財政の整理等に関する調査が着手されることになった。

77） 後藤農相は内政会議のなかで，「農民精神の作興」のための農村中堅人物養成施設の必要性を唱えた。この教育施設が「農民道場」と呼ばれることになる。「農事試験場及農事講習所規程」改正により，「農民道場」の正式名称は修練農場となったが，1934 年度に 20 箇所設立され，その後も増加し続けた。

78） 1933 年 11 月 3 日，朝香宮妃允子内親王（明治天皇の第八皇女）が亡くなった。

79） 第 65 議会において，農村対策のための追加予算約 2100 万円が認められた。

80） なお，佐々木隆「荒木陸相と五相会議」をはじめとする先行研究では，荒木の辞任の理由として，自身の病気よりも五相会議においてソ連との対決を重視する荒木の対外政策が受け入れられなかったことを重視している。